

ナチズム研究の今日性をめぐって

——シンポジウム「ナチズム研究の展望」に参加して——

川喜田敦子

1 はじめに

二〇一五年九月二〇日に開催されたドイツ現代史学会第三八回大会のシンポジウム「ナチズム研究の展望」は、「民族共同体」の問題を中心にナチズム研究の展望を考えることを企図したものであり、ナチ体制を支える社会的合意の形成を促したものは何だったかについて、むきだし
の強制ではないところにある感情、魅力、共鳴、幻想、反発などの要素に着目しながら分析が行われた。本稿では、シンポジウムを振り返り、三本の刺激的な報告から受けた示唆について述べながら、ナチズム研究の今日性について考えてみたい。

2 ナショナルと普遍のはざまの市民的価値

——小野寺報告へのコメント——

小野寺氏は、ナチズム研究の研究動向を綿密にまとめることを主眼とし、実証部分については省略されたが、氏の問題意識が実証研究の形で展開されたものとして念頭に置くべきは、『専修史学』に掲載された論文であろう。この論文は、「クリスマス」という西欧が共有する文化と“Gemüchlichkeit”（心地よさ）を作り出す能力やそれを大切に
する感性と
といった人間に共通しているはずのものが、なぜか「ドイツ的」という言

葉で語られるという現象を分析し、市民的価値観（リスベクタビリティ）と日常性のなかに潜むナショナルリズムの結合がもつ内向きの統合力、体制支持と戦争継続へのポテンシャルをあぶりだしたものである。^① 今回の報告でも、“Anständigkeit”（まともさ）のような市民的価値や道徳が体制を支え、共同体の「情動的統合」を強化したという側面に言及があった。市民的価値とナショナルリズムのあいだに見られるこの結びつきは、ナチ体制崩壊後はどう変化・解体していったのだろうか。戦後ドイツが分断国家となったことを考えれば単純な議論はできないが、この問題について考える際にひとつの焦点となるのは、西ドイツであれば一九六〇年代末以降であろう。この時期には市民的価値の再定義が起きたためである。市民的価値とナショナルであることは、ナチ時代にはきわめて近い位置にあったが、六〇年代末以降には、市民的価値から、公正であること、非暴力的であること、平和的であること、普遍的であることへの回路づくりが進み、“Zivilität”という概念を核として、市民的であることと文明的であることの重なりが強まっていった。

他方、日常性のなかに潜むナショナルリズムを社会から完全に取り除くことは現実的ではないし、必ずしも求められてもいない。戦前から継続するナショナルな感情が次の体制の安定には寄与しなかったと言うこともできないだろう。さらに言えば、市民的価値観や非政治的な感情には、すでにナチ時代からして、体制を支えただけでなく、それを脅かした側面もあつたはずである。^②

そうした諸々を踏まえて私が関心をもつのは、大きな政治的転換を越えるときの価値観や心性の転換と継続をどう見ればよいかという問題である。体制を支えもすれば脅かしもする、様々な感情をもつ個々の存在が共同体を構成するなかで、その共同体においては、彼らが政治判断を

下す主体として存在している。「小文字の政治という経路」としての個人の感情を切り口にした研究が「大文字の政治」に戻っていくうえで、政治的転換と心性の転換・継続について考えることは、その道筋を示す手掛かりにはならないだろうか。

3 国民の私益に奉仕する政治? —— 田野報告へのコメント

田野報告は、小野寺氏の研究動向でも言及された「賛同に基づく独裁」——独裁に対する合意の側面——に関連して、人びとの合意を得るべく体制側が提供したヴィジョンと、それを実現するための努力に焦点を当てたものだった。

社会の多数が何を魅力と感ずるかという点で、ナチの宣伝が時代の要請をうまくつかんだことは確かだろう。消費への願望、生活の安定は、第二次世界大戦後に占領国でさえ無視できなかった点であり、西ドイツでも「経済の奇跡」とエアハルトの人氣が体制を安定させる機能を果たした。ナチが提示した消費社会と生活水準向上のヴィジョンは確かに人びとの心をとらえ、戦後にいたるまで影響力を残したことになる。また、そもそも、ヴァイマル共和国末期の閉塞の時代にあつて、絶望する社会の多数に対して——生活の向上であれ、国民集団内部の分裂の克服であれ、平等な業績社会であれ——よりよき社会に向かう幸福な未来をヴィジョンとして描き出すことに成功したのは、左右の急進主義たるナチズムと共産主義のみだったというI・カーショアの指摘もある³⁾。

他方、体制がそれなりに真剣な構想をもつて提供しようとした消費財(ラジオ・乗用車・冷蔵庫・住宅など)のいずれをとつても、プロパガンダと現実のあいだには大きな溝があつたことも事実だろう。ただし、

田野氏によれば、消費財生産は再軍備計画とぶつかつて十分な展開をみなかったとはいえ、その構想された規模は完全に非現実的だったわけではなかったとされる。換言すれば、仮にドイツが軍事力を背景に最終的に勝利し、ヨーロッパ大陸を広範に支配下に置いたならば、その暁には実現されえたかもしれない規模だったということになるか。この状況は、プロパガンダに実がなかつたという以上に深刻な問題を提起するよう思われる。他者の抑圧と搾取のうえに豊かな消費社会を築くことに對して、当時のドイツ社会がそれを魅力ととらえ、問題とはとらえなかつたことを示すものだからである。これは、社会経済史家H・ベルクホフが *Volkswagen, Volksempfänger, Volksgemeinschaft* (W・ケーニヒ著) の書評で指摘していることでもある⁴⁾。

生活水準向上のヴィジョンと体制支持という田野報告で扱われた問題を考えるにあつて思い出したのは、イギリスの政治学者B・クリックが、A・トクヴィルの議論をポピュリズムの危険性を論じたものと位置づけて紹介した箇所である。トクヴィルは『アメリカの民主政治』のなかで、「専制がこの世界に出現するとしたら「…」そのような政府は人びとの幸福のためとあれば労苦をいとわない。「…」それは人びとの安全を保障し、人びとが生きていくうえで必要不可欠なものを予見してそれを供給し、人びとの快樂を援助し、人びとの主要な関心事を巧みに処理する⁵⁾」、そして、そのなかで人びとは主体的に疎外されていき、何もかも自分のためという意味での個人主義に墮していく、という議論をしている。これは、J・S・ミルが「全員が平等であつても全員が奴隷である、ばらばらの個人の集合体」と評した状態であり、こうなると「the public」(人びと)がたまたま「interest」(関心)をもっているものと「the public interest」(公共善)が混同される事態が起きる、とクリックは述

べる。⁽⁶⁾

これを踏まえて考えると、ナチ体制が提供した「パンとサーカスとヴィジョン」⁽⁷⁾は、民主主義の内部に巢食う脅威としてのポピュリズムという、古くから指摘されていて、今日も解決されていない問題をより鮮明にするものと思われる。したがって、ナチ体制が大衆を利用し、大衆に支えられながら、しかし、本来的な「善き統治」のあり方から大衆を疎外していく——大衆も自ら疎外されていったのかもしれない——過程において、ナチが人びとに提供したヴィジョンと満足はいかなる機能を果たしたかを考えていく必要があるだろう。

4 民主主義と「善き統治」のあいだ

——小野報告へのコメント

小野報告は、ヴァイマル共和国崩壊以降の新自由主義の知識人について、経済思想、宗教的世界観まで含めて論じるものだったが、ここでは田野報告からの流れで、新自由主義の大衆デモクラシー批判について考えてみたい。

民主主義に対しては、プラトン、アリストテレスに始まり、民衆・大衆への不信感と表裏一体となった懐疑的な視線が長く向けられてきた。⁽⁸⁾しかし、近代国家——軍事政権、独裁政権、社会主義政権も含めて——は、多数者をどこまで積極的に動員するかに違いこそあれ、ともかくも人びとの同意を得たという構えを必要としている。そのため、二〇世紀には、専制政治をとりながらも「民主主義」を名乗る国家が少なからず出現した。⁽⁹⁾また、H・アーレントは、全体主義運動が大衆を基盤として成功を収めた経緯を論じるなかで、全体主義運動は「民主主義的な自由

を葬るためにほかならぬその自由を利用」したと指摘している。⁽¹⁰⁾

専制、全体主義と民主主義をめぐるこのような問題に加えて、先に指摘したポピュリズムの陥穽も考え合わせるならば、単に「多数者の同意」というだけの形式的な意味でとらえられた民主主義は、専制であれ全体主義であれ、その正当化に用いられうるし、現に用いられてもきたことが分かる。⁽¹¹⁾この議論は、不用意に行えば、民主主義に対する典型的な懐疑論・否定論になりかねないが、民主主義を常に進行形の「未完のプロジェクト」ととらえ、民主主義を育むという視座のもとに、民主主義の抱える脆弱性に対峙していかない限り、民主主義の成熟も深化もない。⁽¹²⁾ナチズムの経験が語るのは、民主主義の抱えるまさにその脆弱性であり、民主主義によって「善き統治」を保ち続けることの困難さである。

民主主義は「善き統治」を構成する重要な要素の一つではあるが、それ自体が「善き統治」を意味するわけではない。クリックは、この前提から発して、シテイズンシップ教育（市民的能力の育成）の必要性を論じる。ヴァイマル共和国の崩壊の経験を踏まえて、意識的な政治教育の道を選択した西ドイツも同じ方向性をとったということになる。これと比較したときに、同じように、人格的自由の喪失と大衆化という民主主義のなかに潜む危険への危機意識から発しながら、制度としての民主主義の廃止へと論を運んでいった、新自由主義をはじめとするヴァイマル共和国期の保守派の議論のもつ大きな限界と弊害が見えてくる。

他方で、小野報告では、新自由主義が「人格」と *„Sittlichkeit“*（道徳）の考え方を取り入れていくという指摘もあった。私はこれを、経済まで含めた社会の全体構想を普遍的価値といかに結びつけるか、という普遍性の希求の問題として聞いた。ナチズムへの反論がこうした形で結実していったことは示唆的である。オルド自由主義においては、これが宗教

的な世界観のなかで構想されるが、戦後、欧米的価値の探究を通じてなされていく世俗的な意味での普遍性の希求とあいまって、小野寺報告に関連して述べた六〇年代末以降の市民的価値の再定義へとどのようなようにたるとのかに関心を覚えた。

5 ナチズム研究の今日的課題

われわれは、民主主義という、「善き統治」の前提だがそれだけでは「善き統治」の実現を保障しない制度を選択し、また、選択しつづけるにしている。その難しさを引き受けるにあたり、——内向きな価値観や感情のなかでの自己満足であるにせよ、近視眼的な幸福の享受による疎外といった主権者たる市民としての資質の問題であるにせよ、そこから生じる危機にどう対応するかをめぐる社会と制度の構想・設計の問題であるにせよ——ナチズムの経験は多くの考えるべき点を含む。

形式としての民主主義と「善き統治」の間には距離がある以上、われわれは民主主義の質を常に問い、高めていかねばならない。それにもかかわらず、われわれは今、民主主義や立憲主義の内実を逆に自ら引きずり降ろそうとする時代のただなかに身を置いている。その意味で、ナチズム研究がこれほど今日的な意味をもつ時代はこしばらくなかったと言つてよい。極めて嘆かわしくも、ドイツ現代史を研究する者にとつて責任の重い時代になったと考える。

注

(1) 小野寺拓也『『穏やかな』戦場のメリークリスマス一九四四』『専修史学』

第五三巻、二〇一二年、一・三六頁。

(2) 小野寺、前掲論文、三一頁。また、ディスカッションの際に田野氏が

言及されたように、ナチズムの主張のなかに小市民的な市民道徳の偽善性への反発や異議申し立てが含まれていたことも見落としてはならないだろう。田野大輔『愛と欲望のナチズム』講談社、二〇一二年、一〇―一一頁参照。

(3) I・カーショール『ヒトラー(上)一八八九―一九三六 傲慢』石田勇治監修・川喜田敦子訳、白水社、二〇一五年、四二八頁。

(4) Hartmut Berghoff, „Rezension zu: König, Wolfgang: Volkswagen, Volksempfänger, Volksgemeinschaft. „Volksprodukte“ im Dritten Reich, Paderborn 2004“, in: H-Soz-Kult, 04.11.2004. (<http://www.hsozkult.de/publicationview/id/rezuecher-4176>) (最終閲覧日: 二〇一六年四月一三日)

(5) A・トクヴィル『アメリカの民主政治(下)』井伊玄太郎訳、講談社学術文庫、一九八七年、五五九―五六〇頁参照。第三巻第四編第六章の該当箇所をB・クリック『デモクラシー』添谷育志・金田耕一訳、岩波書店、二〇〇四年、一一〇―一一一頁の訳を一部改変して引用した。クリック、前掲書、一八―一九、一〇三―一一一―一一三頁。

(7) W・シヴェルプシュは『三つの新体制—ファシズム、ナチズム、ニューデール』小野清美・原田一美訳、名古屋大学出版会、二〇一五年のなかで、「パンとサーカスという古代ローマ時代の組み合わせ以来、あらゆるプロパガンダの目的は、最良の世界「…」への途上にあるという感覚を公衆に与えること」(八九―九〇頁)だと述べている。

(8) 岩崎美紀子『比較政治学』岩波書店、二〇〇五年、九頁。

(9) Samuel E. Finer, *The Man Horseback*, Second enlarged edition, Boulder: Westview Press, London: Pinter Publishers, 1988, pp. 220-221. クリック、

- 前掲書、一一・一七頁参照。
- (10) アーレント『全体主義の起原3 全体主義（新装版）』みすず書房
一九八一年、一三頁。
- (11) 添谷育志・金田耕一「クリツクのデモクラシー論」クリツク、前掲書、
二一四・二一七頁。
- (12) 千葉眞『ラディカル・デモクラシーの地平―自由・差異・共通善』新
評論一九九五年、二、四、二三七・二三八頁。
- (かわきた あつこ・中央大学教授)

